

氏名 (生年月日)	イ 李	カ 佳	ヨシ 娟	(1981年8月27日)
学位の種類	博士 (文学)			
学位記番号	文博甲第103号			
学位授与の日付	2016年3月18日			
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項			
学位論文題目	副詞「よく」の多義性			
論文審査委員	主査 藤原 浩史			
	副査 林 明子・半沢 幹一 (共立女子大学)			

### 内容の要旨及び審査の結果の要旨

#### 1 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

##### 第1章 はじめに

1. 研究の目的
2. 先行研究
  - 2.1 「よく」に関する先行研究
  - 2.2 多義的副詞に関する先行研究
3. 研究方法
4. 本論文の構成

##### 第2章 副詞「よく」の用法の分類

1. 本章の目的
2. 「よく」の用法
3. 二つのテスト
  - 3.1 文副詞か部分副詞か
  - 3.2 典型的な副詞との置き換えが可能か
4. 資料分析

##### 第3章 評価表示の「よく」

1. 本章の目的
2. 先行研究と研究方法
3. 資料分析
4. 評価表示の「よく」の文の特徴

- 4.1 文中での位置
- 4.2 後続語の有無
- 4.3 授受表現との関係
- 4.4 可能表現との関係
- 4.5 打消しとの関係
- 4.6 まとめ
- 5. 意味による分類
  - 5.1 肯定的な評価
  - 5.2 否定的な評価
- 6. 意味の仕組み
  - 6.1 「よく」と「まさか」の比較
  - 6.2 まとめ
- 第4章 情態表示の「よく」
  - 1. 本章の目的
  - 2. 先行研究と研究方法
  - 3. 資料分析
  - 4. 意味による分類とその特徴
  - 5. まとめ
- 第5章 程度表示の「よく」
  - 1. 本章の目的
  - 2. 先行研究及び程度性の規定
  - 3. 研究方法と資料分析
  - 4. 程度表示の「よく」の特徴
  - 5. まとめ
- 第6章 頻度表示の「よく」
  - 1. 本章の目的
  - 2. 先行研究と研究方法
  - 3. 資料分析
    - 3.1 文体の確認
    - 3.2 入れ替え可否の確認
    - 3.3 「ものだ」との呼応
    - 3.4 まとめ
  - 4. 「よく」と「しばしば」の比較
    - 4.1 「よく」文の特徴
    - 4.2 「しばしば」文の特徴

#### 4.3 「よく」と「しばしば」の意味の構成要素と事柄の現れ方

#### 4.4 まとめ

### 第7章 副詞「よく」の意味構造

1. 本章の目的
2. 「よく」の〈評価性〉
  - 2.1 評価表示の「よく」の〈評価性〉
  - 2.2 情態表示の「よく」の〈評価性〉
  - 2.3 程度表示の「よく」の〈評価性〉
  - 2.4 頻度表示の「よく」の〈評価性〉
3. 「よく」の意味構造
4. まとめ
5. 本論文の成果と課題

#### 参考文献

#### 資料

## 2 本論文の要旨

本論文は全7章の構成からなる。第1章は、研究の目的、研究対象、研究方法の提示であり、研究についての概観を提示する。本研究の対象は多義の副詞「よく」であり、その多義性を取り上げるものである。各用法の意味分析を通して、多義がどのような関連を持って結び付いているのか、理論的なモデルを構築することを目的とする。研究方法は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』(BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) を利用し収集した用例をもとに意味分類検査を行った。また、先行研究の研究状況を示す。「よく」に関して、森田(1989)、飛田・浅田(1994)、グループジャマシイ(1998)、日本国語大辞典第二版(2002)、近藤(1986)、森本(1991)があり、「よく」に少なくとも三つの用法があること、しかし各用法の意味的関連性を説明するものがないことを確認した。多義的副詞に関する先行研究として藤原(2005)を取り上げ、限定的な意義素とその場面での組み合わせが多義を生むという記述を方法的に利用して研究を進める。

第2章においては、用例を「よく」の各用法に分類するため、二つのテストを行った。一つ目のテストは文副詞か部分副詞かを分けるためのものである。「よく」が修飾する範囲が文全体か、述語だけかによって文副詞と部分副詞とに分け、文副詞の方を評価表示の用法とした。二つ目のテストは典型的な副詞との置き換えが可能かを確認するもので、まず「しばしば」とのテストから頻度表示の用法を分類し、残りに対して「非常に」とのテストを行い、置き換え可能の方を程度表示の用法とし、不可能の方を情態表示の用法とした。各用法は全2041例のうちそれぞれ493、155、260、1133例という結果となったが、用例数の多い用法は表現の多様性に乏しく、「よく」の代表的用法と考えにくい。そのため、用例数ではなく、意味を中心に評価表示の用法から研究を行うこととした。

第3章は「よく」の各用法を取り上げる各論の第一として、評価表示の用法に関するもので、李佳娟（2013）「副詞「よく」の評価表示の意味論的考察」が初出論文である。まず評価表示の用例を会話文と地の文という文体の観点から分類した結果、会話文の方に圧倒的に多く使われていた。次に文の特徴について、「よく」の文中での位置、後続語、授受表現、可能表現、打消しマーカールとの共起関係を中心に考察したところ、評価表示の「よく」は文頭に来やすく、後続語を伴うことが可能であり、授受表現・可能表現との共起率がかなり高く、打消しとはほとんど共起しないことが明らかになった。また、意味による分類を試みたところ、大きく肯定的評価と否定的評価とがあり、文の中で賞賛、歓迎、驚嘆、非難といった具体的な意味を表していることがわかった。その一方で、いずれも同じ文のしくみをもって、予想外の事態が実現した時の話し手の評価を表していることが明らかになった。さらに予想外という特徴を持っている「まさか」との比較研究を試みたが、その結果、「よく」と「まさか」は話者が実現可能性を念頭に入れているか否かの相違があることが明らかになり、二語の表す予想外はその特徴を異にしていることを示した。要するに、評価表示の「よく」の意味の構成要素は〈評価性〉であって、具体的に言えば〈話者の予測を基準とした予想外の事態とそれに対する話者の（通常肯定的）評価〉である。

第4章は情態表示の用法に関するもので、李佳娟（2012b）「副詞「よく」の程度表示の意味論的考察」が初出論文である。情態表示の用例は基本的に事態のあり方を表し、充実性、确实性、十分性といった具体的な意味を表していた。それぞれ結果状態を表す形式と共起しやすい、依頼・命令の形式との共起が際立つ、否定の形式と共起しやすいという特徴を持っていた。また、その一方、共通した特徴として、状態の変化を有する述語を対象に程度的に捉え、それが評価性をもつことが明らかになった。情態表示の用法は従来の研究で程度的な用法との区別があまりなされていなかったが、考察を通し、程度表示の用法とは異なる、それなりの特徴を持っていることが明らかになった。

第5章は、程度表示の用法に関するもので、典型的な程度副詞である「非常に」との置き換えが可能な用例を対象に検討を行い、まずアスペクトの観点から状態変化の結果相と単なる状態を表すものに分けることができ、状態の程度が高いという意味を〈程度性〉と規定した。程度表示用法の〈程度性〉は、情態表示の程度的捉え方とは異なり、変化の度合いではなく、度合いの高さを問う。そして、基本的に情態性動詞にかかってその程度の高さをとりたてるものである。ただし、単に程度の高さのみを表すのではなく、状態変化の結果相と結果継続の状態の特徴をもつ述語と、その度合いが最大値に近いこととの組み合わせが〈評価性〉をもつ。そしてそれは、結果を取り立てる副詞となり、程度表示の「よく」の意味特徴である〈程度性〉が表れることが明らかになった。

第6章は各論の最後である頻度表示の用法に関するもので、李佳娟（2012a）「副詞「よく」の頻度表示の意味論的考察—「しばしば」との比較から」が初出論文である。頻度表示の「よく」を典型的な頻度副詞である「しばしば」と文体・入れ替えテスト・慣用度という観点から比較研究を行った。その結果、「しばしば」が文章語的であるのに対し、「よく」は文章語・口語を問わず、自由に使われることが明らかになった。そして「しばしば」が「いちばん」の修飾を受けられないのに

対し、「よく」は修飾を受ける副詞の制限がなかった。最後に「ものだ」との共起率を調べた結果、「しばしば」に比べ「よく」の方が「ものだ」と若干共起しやすい結果となった。「よく」と「しばしば」は回数が多いという点で同様の意味の構成要素をもつと言え、置き換え可能であるが、「しばしば」には、時間枠があり、「よく」は時間枠が必須ではない。そのかわりに、事柄が累積し、これが〈評価性〉をもつ。つまり、頻度表示の「よく」は、「しばしば」にはない反復動作が累積するという特徴をもっていて、反復継続の動詞述語とその累積計算との組み合わせが〈評価性〉を有し、頻度表示の「よく」意味特徴である〈頻度性〉を構成するのである。

第7章は、各論の内容をまとめ直し、「よく」の意味構造を明らかにする章であり、李佳娟(2015)「副詞「よく」の意味構造」が初出論文である。各用法の考察から「よく」の意味の構成要素は〈評価：→〉であることが明らかになった。まず評価表示の用法の〈評価：→〉は、動詞文を対象として、話者の予測を基準に、期待される事態の実現に対する話者の肯定的評価である。情態表示の用法は、話し手と聞き手の共有した情報を基準に、状態変化の述語を対象とした、話者の程度的捉え方である。程度表示の用法は話し手と聞き手が共有した情報を基準に、状態変化の結果相と結果継続の状態の述語を対象として、最大値に近いという話者の判断であり、頻度表示の「よく」は、話者の記憶を基準に、反復継続の述語を対象とした、累積計算による話者の判断であることが確認された。結論として「よく」の多義性は〈評価：→〉という意味の構成要素が文法的機能の分岐によって現れる現象であることが明らかになった。

### 3 本論文の評価

本研究は、日本語の語彙論であり、意義素分析による意味研究である。本論考の研究対象、副詞「よく」に代表されるように、日本語の副詞にはしばしば多義現象が認められるが、その用法の記述は行なわれてはいるものの、多義化する理由、多義語の意味構造など、本質的な説明はほとんど行なわれていない。これは、日本語の学習者にとっても難題であり、当該分野での進展は、日本語研究・日本語教育において、高い価値をもつ。

研究方法としては、国語辞典等の意味記述をおさえつつも、その問題点を指摘し、単語の意味だけでなく、文の意味、文脈の意味から、副詞「よく」の意味を再構築する方法をとる。これにあたって、単語の意味を、意義素の集合体と認め、単語独自の意義素の構成を意味構造とする。これは、日本語の意味分析手法として有効と認められつつも、いまだに方法論として確立していない方法でもある。多義語のしくみを解明する事例研究として先駆的価値をもつものと評価される。

副詞「よく」は、従来「頻度表示」、「程度表示」、「評価表示」の三つの用法にわけられていたが、「情態表示」の用法が分岐することを見だし、四つの用法があることを第二章において明らかにしている。豊富な用例を一定の手続きで処理した結果、この新知見を得たものと評価される。この手続きによって、細かな意味分析が実施可能となった。以下、個々の用法の意味分析を行うが、モダリティ的な要素として働く用法から、アスペクト的な用法へと進め、文法カテゴリーと意味の対応関係を明らかにしている。

第3章では文副詞「評価表示」の「よく」の用法を、〈話者の予測を基準とした予想外の事態とそれに対する話者の（通常肯定的）評価〉と細密に定義する。第4章では、「情態表示」の「よく」を「結果状態を表す形式と共起しやすい充実性、確実性、十分性」と記述する。第5章では「程度表示」の「よく」を、状態変化の結果相と結果継続の状態の特徴をもつ述語の度合いが「最大値に近いこと」と〈評価性〉の組み合わせによって程度性が生ずることを明らかにする。第6章では「頻度表示」の「よく」が、反復継続の動詞述語の「累積計算」と〈評価性〉の組み合わせによって〈頻度性〉を構成することを明らかにする。以上の各用法の意味記述は、精緻かつ正確である。本研究では、記述にとどまらず、四つの用法に共通する成分〈評価：→〉があり、これが文法的な要素と関係性をもつことで意味を形作るモデルを構築する。単語としての意味はシンプルであるが、構文の中で文法的な意味と関係することで、副詞としての意味を形成するタイプの単語であり、これが多義性として見えていることを第7章において明らかにした。

新しい方法論による意味研究の提示であり、基礎語において先駆的なモデルを提示したことは高く評価される。また、この方法論において、従来、意味の記述が困難で、また、日本語教育における難問であった多義的な副詞の一群について、効果的な理解と教育方法をもたらす可能性を示したことは日本語の意味研究に波及するところが大きい。

ただし、この多義構造のモデルについては、今後の発展を期待するところがいくつかある。理論的な研究である以上、基礎概念の明確化と洗練が必要であるが、「よく」の意義素の基礎となる「評価」の用語には、ニュートラルな概念と、肯定的概念の二重性がある。また、「主観」という概念は「話者の判断」とも重なる表現であるが、これが「客観的な基準」を要するという記述もある。かような現象はたしかに存在するが、その説明には洗練を要する。また、文脈・場面に依存する現象について、意味論として説明する場合と、語用論として除外する場合がある。主論の一貫性のために、周辺部分の記述を捨象したことによるものであるが、これによって意味論の全体的構想が希薄化しているところは、改善を要する点である。

総合的に見るならば、意味論の研究史において、論じることが厄介なために敬遠されてきた副詞という品詞を対象とし、しかも扱いの困難な多義構造について、類を見ない本格的かつ精緻な論であり、多義における相互の意味関係を、豊富な現代語の用例から、明確かつ包括的に実証しており、博士学位を授与する価値を有する論文と評価する。